豊かな友達関係を育む学級活動

ー第１学年「ともだちのいいところをさがそう」の実践を通してー

阿比留　時　彦

１　はじめに

昨年度を振り返ると，中学生がいじめを苦に自らの命を断つという，悲しく痛ましい事件が引き金となり，子どもたちの希薄な人間関係が大きな社会問題へと広がった。また，本年度に目を向けると，月２回の学校週５日制が実施に移され，より現実的に，家庭・社会・学校の果たす役割を考えさせられるとともに，自ら考え，主体的に判断し，行動するために必要な資質や能力の育成を重視する学力観がより一層問われている。

私たちは，“子どもの今”を見つめ，今，何が大切なのか，今，何が子どもたちに求められているのかを模索する中にあって，“豊かな感性を育む”ことを柱に据えて取り組んでいる。感性を知性・理性なども含めた母体のようなものととらえ，事象から受け取る鋭さや豊かさ，また，物事を実践化するための積極的で総合的な発信源になる力ととらえている。激しく変わり行く社会生活の中にあって，子どもたちの学校生活がより安心できる場として，友達との温かなつながりを育みながら，子ども自らが自分らしさを発揮し，相互に認め合い高め合いながら，主体的に過ごせるよう願っている。

“豊かな感性を育む”ことが，特別活動（本稿では学級活動）においては，生き生きと主体的に実践する子どもにつながる視点を見据え，そのための教師の働きかけや，基盤となる学級集団の重要性がますます求められているのではないだろうか。

２　指導事例　第１学年　「ともだちのいいところをさがそう」
～にがおえクイズをしよう～

(1)　題材について

学校生活にもなれ，たくさんの友達と自然体で付き合えるようになってきたこの頃。ちょっとしたトラブルは日常茶飯事の中で，良しにつけ悪しきにつけ，友達として，またクラスとしての仲間意識が強まってきている。学校生活が生活リズムの大きな部分を担う中で，当たり前になってきている友達との関わりに，相手をよく観察した初めての出会いのころの目と心を思い出しながら，今一度立ち止まり，見つめ直し，そのよさに着目させる時間をとることは意義深いことと考えられる。

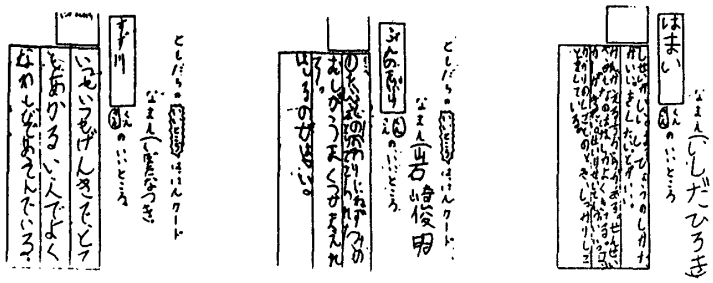
自分は友達からどのように見られているのだろうか。また，自分の気がつかないよさを友達の思いから発見できるかもしれない。そして，自分のよさを見直し，友達どうしがよりよくつながり，お互いになかよく認め合える関係を意識してくれればと考えている。本学級の子どもたちにアンケートを実施した結果，クラス全員が仲良しがいると答えている。遊ぶ人数は，男子が多人数で遊ぶことを好む傾向を示し，女子では多人数に加え，３名前後での遊びを好む傾向も見せている。また，男子の若干名に，一人で遊ぶことが多いとの解答が見られた。けんかをしたことの有無を尋ねると，約半数の子が，あると答えている。些細なことをけんかと見ない傾向も見受けられるようである。けんかの原因はやはり，遊びを通してが多く，悪ふざけ・ルール違反・一つのものの取り合い・仲間に入れるか否かなど，またけんかの仕方は，口げんか・暴力となっている。

(2)　指導の経過と展開・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（全2.5時間）

第１時　友達のいいところ見つけをする。・・・・・・・・・・（１／２時間）＋帰りの会

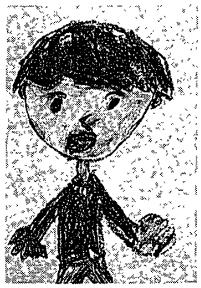
普段の係活動で，「自分の似顔絵コンクール」「実習の先生の似顔絵コンクール」とアイデアを出しながらの活動を展開していた子どもたちに，「友達の似顔絵あてっこクイズ」を提案したところ，おもしろそうとの反応が返ってきた。絵のみで分かりにくいときのために，この人のいいところをヒントにすればどうかと提案し，帰りの会までにその人をよく見ておいて，メモするようにした。

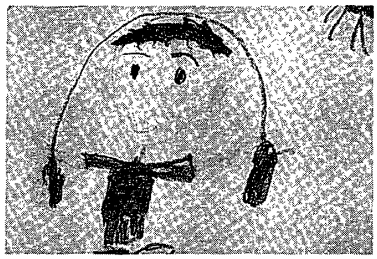
だれがだれを描くかについては，学習で活用している記名カードを使い，裏返して，見られないように１枚めくり自分以外の人を引き当てることにした。



第２時　友達の似顔絵を描く。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（１時間）

その友達に見つからないように描くのは，なかなか骨が折れるようだが，にやにやしながら楽しそうに描く姿が見られた。絵は，その人の顔のみに限定するというのではなく，その人のいいところが伝わるような形を工夫してよいことを付け加えた。子どもたちは，大きく顔を描くことに加え，なわとびをしているところやロッカーをきれいに片付けている所など，思い思いの絵を描く姿が見受けられた。





第３時　似顔絵と友達のいいところを基に，誰なのかを当てる会をもつ。・・・（本時）

なお，司会者との打ち合わせについては，休憩時間を利用した。黒板に貼るカードを作成したり，会の進め方について話し合ったり，練習したりすることで，見通しをもってのぞめるよう配慮した。

(3)　本時，『授業設計の焦点』の抜粋から

司会をする子どもたちは初めてなので，安心した雰囲気の中で，自信をもって進められるよう，いつでも励ましたり，手助けできる言葉かけや教師の立つ位置に心がけたい。また，クイズにおいては，教師が行って見せ，発表の形式を理解させるとともに，学習への雰囲気づくりを行うことで，次に行うグループでのあてっこ遊びに意欲をもってのぞめるよう働きかけたい。そして，友達のいいところに気付き，グループみんなで一人の友達のよさをもう一度考え，探ってみる活動を組むことにより，友達を見る広がりや深まりを期待したい。活発に活動している子どもや自分たちだけで自主的に活動しているグループを称賛するなど，適宜，評価しながら意欲の高まりを促していきたいと考えている。

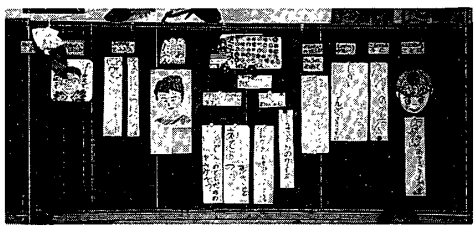
本時の目標

友達のいいところに気付き，進んで話し合いに参加できる。

評価の観点

個性の伸長	友達や自分のいいところに気付く。
社会性の育成	友達の発表をさいごまでよく聞き，協力していこうとする。
自主的・実践的な態度	全体やグループ活動に進んで参加しようとする。

学習指導案の展開から

学習活動	指導・支援活動
1　はじめのことばを言う。	1　司会のことばを言う子どもたちははじめての経験なので，自信をもってできるように全員で励ます雰囲気をつくる。
2　今月の歌を歌う。	2　今月の歌「冬の歌」を楽しく歌う。
3　活動のめあてについて先生と話す。	3　子どもたちに今日の活動を問いながら似顔絵あてっこを通じて，友達のいいところをたくさん見つけられるように励ます。
4　似顔絵あてっこクイズをする。 教師による演示 ↓ グループ活動 (1)　似顔絵を見て考える。 ↑ ↑（相互的に） ↓ (2)　その人のいいところをヒントに考える。 (3)　当たったら，その人のいいところを考えて，付け加える。	4◎見通しを持たせるために教師がみんなの前で行ってみせる。 描いた子どもは似顔絵を提示すると共に描かれた子どもの特徴（その人のいいところ）をヒントに出しながら，応答できるようにする。そのため机間指導の中でアドバイスや励ましの言葉かけを随時行う。
	 ◎先に書いておいた「友達のいいとこ発見カード」にグループみんなで見つけた「いいところ」を書き加えて，絵の下に貼る。
5　描いた似顔絵を本人に渡し，自分で見たり，読んだりする。	5　よかったこと，面白かったことなどを発表し，6の活動につなげる。
6　5を見て，感想を持つ。	6◎感想カードを活用する。
7　先生の話を聞く。	7　幾人かに感想を聞き，いいところを見つけ合うのは，みんなが仲よくするために大切であること

8　おわりのことば	を伝え，今後ともよりよい友達関係を築いていくよう励ます。また，司会係や進んで活動した子どもたちのがんばりなどを称賛する。

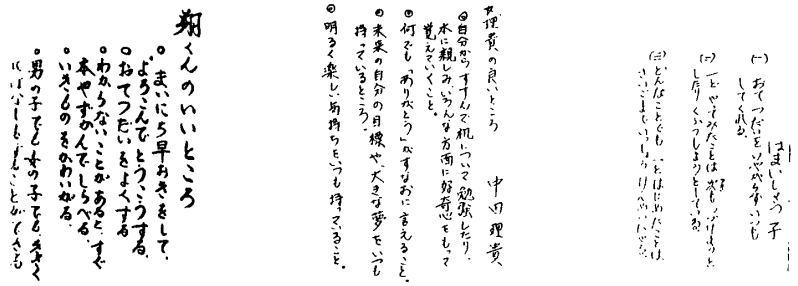
(4)　**事後の指導と子どもたちの活動**

・似顔絵は子どもたちの目に届きやすいように教室内に掲示した。

・子どもたちどうしの温かなつながりをもとめての活動であるので，帰りの会などで友達のいいところを発表しあう活動を設けた。

・家庭に呼びかけ，家庭での子どもたちの様子について，そのいいところやすてきなところを教えていただいた。学校生活では見られない意外な面もたくさんあって，楽しくあてっこクイズを行った。

・友達のいいとこ発見ボックスを作り，常時活動に役立てている。



3　本時授業の実際と考察

本時学習指導案及び評価観点をもとに，以下のように授業仮説を設定し，分析の視点とした。

＜授業仮説＞

似顔絵クイズを行い，友達のよさを考える活動の場を設定するならば，子どもたちは進んで，友達のいいところを見つけ，友達の見方が深まるであろう。

＜分析の視点と方法＞

①　子どもたちは進んで友達のいいところを見つけようとしていたか。 ②　子どもたちの力でこの会を運営しようとしていたか。

(1)　学習の流れの概要・・・３名を抽出児とし，その子どもたちの活動と教師の指導・支援活動を中心として

◇　めあてを確認し，やり方の説明を聞く場面

最初に今日すること「似顔絵あてっこクイズ」について，絵や掲示物を使って説明する。どの子どもも話をよく聞き，表情が生き生きとしていた。

◇　グループで似顔絵あてっこクイズをする場面

この後，子どもたちは，グループ毎に自分が描いた絵を見せ合い，あてっこクイズを行った。しかし，３名の抽出児のいるどのグループも，ヒントを出す以前にすぐに当たってしまい，一人ひとりが前時に書いた友達のいいところをグループの友達に伝えるまでに至らなかった。

◇　グループのみんなでいいところを見つけ合う場面

同じグループの人が描いた友達に対するよさを見つける場面では，友達の名前を漢字で書くこ

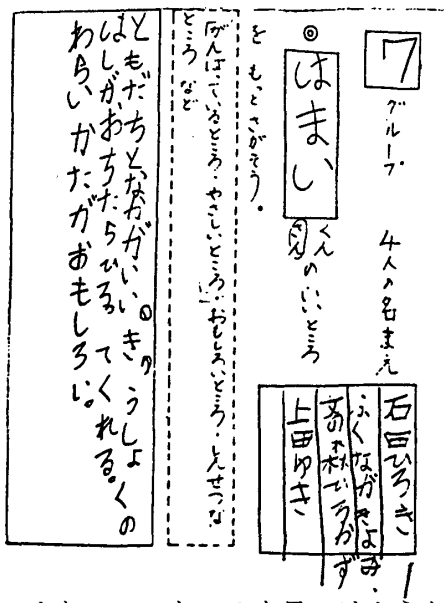
とにこだわっていたり，みんなの意見が合わずになかなかカードに書けない様子が伺え進んで友達のいいところを見つけようとする姿が見られなかった。

(2) **考察**

◎ 視点①について

始めの言葉「今日は似顔絵あてっこクイズをします。」は，子どもたちに，クイズを当てるぞ・・・という意識を持たせたように思われる。しかし，絵を見ていとも簡単に当たってしまったことが，友達のよさをヒントとして与えることを阻み，前時に文章で書いていたいいところが発表されないままで終わった。そのため，グループのみんなでいいところを見つけ合う活動の必然性が薄く，進んで見つけようとすることにつながりにくかったのではないかと考えられる。このように，教師と子どもたちとの意識にずれがあったようである。

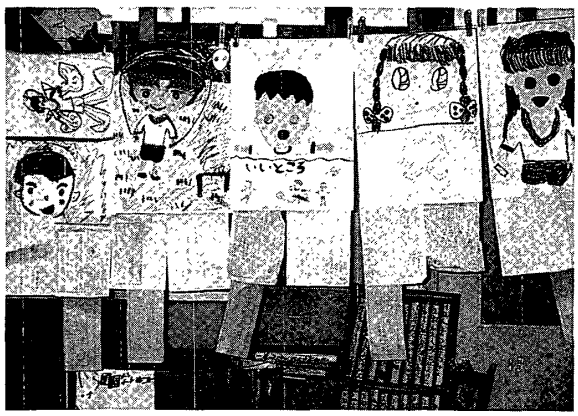
改善案 → クイズがなかなか当たらずに何度もヒントがでるような形式の工夫。
→ まず最初に，見つけたいいところを発表してから絵を見せる。
→ もっとシンプルに，グループで友達のいいところを発表し合うだけの活動。



教師による演示場面で，身近にかかわりのある先生を取り上げたため，子どもの興味を引くものであったが，例示したいいところについては，表面的，結果的なことに向きがちになり，子どもたちの意識は「○○が，上手」に向いていったように思われる。優れている点や得意なことよりも頑張っていること，優しさ，温かさなどを意識的に深めていく投げかけが工夫できればと考えられる。

教師の言葉かけについては，その子どもが「いいところ」と感じたわけを問い直す言葉かけが足りなかったように思われる。その子なりに感じた「いいところ」を，教師にとって分かりにくければ，今一度問いかけ，理解しようとする姿勢を示すことにより，いいところを見つけようとする子どもの意欲を高めていくことになるのでのではないかと思われる。また，活動が複雑であったため，手順が子どもたちに伝わりきらなかったことが，活動に見通しがもちにくかったことにつながっていると考えられる。

◎ 視点②について



本時は，司会を中心に子どもたちの自主的な活動と教師の指導を組み合わせて行う方法を生かすつもりであったが，会の最初と最後の言葉を言うだけに止まり，会の進行は，教師を中心に進められた。一つ一つの活動を確認して進めながら司会の子どもたちに任せる必要があった。子どもの主体性を生かそうとするならば，なるべく教師の指導，助言の少ない方がよく，活動の内容それ自体が子どもにとって必要感のある切実な内容であることが不可欠であったことも深く考えさせられる。

グループ発言の形式については，発言しにくい子にも，全員が話し合いに参加でき，規律よく

発言する姿が見られた。

4　おわりに

本実践は，子どもどうしのよさを見つけ合う活動を通して，友達どうしの，人間的なふれあいを育もうと計画してみた。題材を通して友達のいいところを少しでも意識し，温かなつながりをつくっていけるきっかけにしてほしいと願っている。

反省点として，表面的な目に見える結果やよさのみを追い求めるのみでなく，内面的なもの，過程などの見えにくいものにもっと視点を当てる目を教師自身が培っていくこと，子どもたちの実態にあった必然性のある題材になり得ていたかなど，本質的な課題が残されている。

今後とも，日々の生活に目を向け，子どもたちのよりよい関係を求めて，友達どうしの心の耕しを図れるよう，教師自身の豊かな感性を高めていかなければならない。

なお，最後になりましたが，広島大学の西根和雄先生にご指摘いただいた，

『好きという感情が生まれるとき，好ましい人間関係になっていく。嫌いという感情（悪いイメージ）があれば，意外性を大事にしながら，社会過程でいい関係にしていくことが大切。いい関係なら，すぐにいいところが見つかるが，悪い関係でもいいところを見つけて，よい人間関係にしていくことが大切である。』

を考えに入れ，今後の取り組みに生かしていきたいと考えている。

《参考文献》

・熱海則夫　高岡浩二　高橋哲夫監修『学校週５日制と１・２年生の特別活動』国土社，1993年，79頁。
・広島大学附属東雲小学校研究紀要『豊かな感性を育む』1993年度，181頁。
・文部省『小学校指導書特別活動編』平成元年，24頁。
・成田國英編著『小学校特別活動指導細案学級活動１年』明治図書。